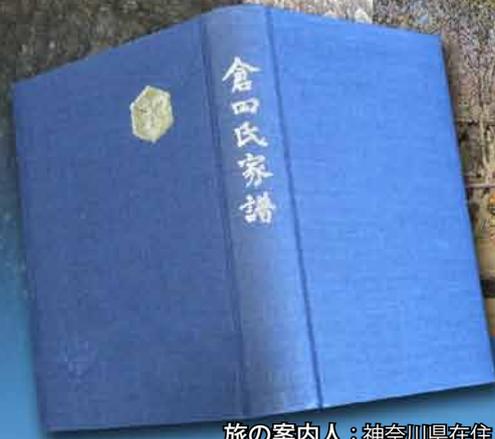


まほろば宮下社長のルーツ案内記

その 3

会津から
後進へ

福島復興から日本の立て直し探訪



旅の案内人：神奈川県在住

大橋 しのぶ

前回までのあらすじ

☆☆☆二〇一五年五月、まほろばの宮下社長と母方の先祖が同じ福島県・会津若松である事が分かりルーツ探しのお手伝いをする事になりました。

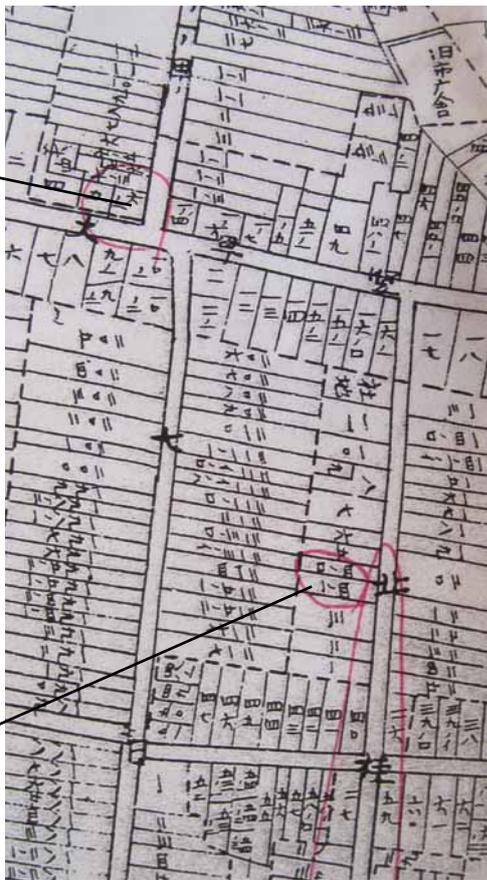
七月、福島県二本松市で講演会をするという奥様の日程に合わせて、会津をご案内する事になり、まず初日は倉田本家の跡地にあるイタリアンレストラン・ルーチェへとご案内しました。☆☆☆

ネットでルーツ探し

夕食後、ルーチェから歩いて数分のホテルに戻ると、ロビーのソファに座り、宮下社長に資料を渡して翌日の行程をご説明しました。

昼間に会津図書館でコピーした古い手書きの住宅地図は番地の判別が大変でしたが、何とか戸籍の住所を見つける事ができていました。

明日は明治期のご先祖様の住居跡を数か所まわり、倉田家の墓所



があるお寺二か所に行く予定である事をご説明すると、宮下社長は、「え〜！在所まで分かったのですか？ ただただ会津の町並みを見て歩くだけだと思っていました。へ〜、すごい、こんな事、思いも付かなかったですね。」と驚かれました。

「いえいえ、私も以前、ルーツ探しの先輩達から、こういう方法を色々教えていただいたんですよ。そういう宮下社長こそ、父方のルーツ探しはかなり実行されていたではないですか(笑)」

「そうなんだけど、明見村の宮下家は戸籍の住所が変わらず、ずっと住んでいてくれて、見つけたから……」

明治・大正期の住宅地図を眺めながらしきりとびっくりされている宮下社長を見て、私は十年前の自分を思い出し、不思議で懐かしい気持ちになりました。

十年前の十月八日、初めて会津若松を訪れ、予想以上に悲惨だった会津藩そして斗南藩の歴史を

知った私は、先祖の事を調べてみようかと決意しました。そして帰りの新幹線の中で母から分かる限りの先祖の名前を聞いてメモをし、深夜に自宅に帰り着くと、すぐにパソコンを開いて先祖の名前を入力してみました。特に名のある藩士ではないのでほとんどダメ元のつもりだったのですが、何と数名の先祖の名前がヒットしたので、これには本当にびっくりしました。

そのHPは会津藩の歴史を紹介していて、会津や斗南の郷土資料を次々とデータ化してネット上にUPしていたのです。そしてそこに載っていた、「斗南藩士人名録」に、二十年前に父から聞かされた、「戊辰戦争に負けた時まだ十歳だったけれど、腰に刀を差して青森まで歩いて落ち延びて行った」という、先祖の名前等が載っていたのです。

毎日仏壇に手を合わせてはいましたが、それまで過去帳の中の戒名でしかなかったご先祖様達が、

にわかに血の通った人間として立ち現れたような瞬間でした。

そしてそのHPでは会津藩士の子孫達が集っている掲示板がありました。まだ当時はフェイスブックやミクシイ等のSNSも今ほど普及していなかったので、ネットに書き込みなどした事がなかった私は数日迷いましたが、思い切って掲示板に投稿してみました。するとHPの管理人さんを初め、沢山の方が樋口家や先祖の情報を寄せて下さったのです。

宮下社長のご先祖様は、戦国時代末期に蒲生氏郷に付いて近江から会津に来た近江商人の家系です



保科正之

が、私の先祖の樋口家は江戸時代に信濃の高遠藩主だった保科正之公に付いて長野から会津やって来た家系である事が分かりました。

さらに樋口家の始祖は、樋口次郎兼光といつて、木曾義仲の四天王の一人であった事などが、ほんの十日足らずのうちに分かってしまったのです。インターネットってやはりすごいツールですね。使い方や間違わなければ、昔なら何年もかけて調べなければならぬ事がほんの数日で分かってしまうのですから・・・。

ちなみに樋口次郎兼光は、木曾義仲の愛妾「巴御前」の兄であり、有名な後裔としては上杉景勝に仕えた直江兼続がいます。

直江兼続は永禄三年、越後にて樋口惣右衛門兼豊の長男として生まれましたが、後に上杉家の重臣である直江家に婿養子にいき直江姓となりました。親子とも名前に「兼」が付いているのは始祖である樋口次郎兼光から一字を頂いて

いると思われませう。

また木曾義仲には漫画家・手塚治虫のご先祖様である手塚光盛も一緒に仕えていたそうで、「ジャングル大帝」や「リボンの騎士」を見て育った私には嬉しい情報でした。

そんな情報が一気に集まり、藩士の子孫等で作られた会津会・斗南会津会を初め、全国各地に様々な会津関係の会がある事等も知り



巴御前

ました。

そこで出会ったルーツ探しの先輩達から、会津図書館にある郷土資料の種類や探し方、古地図を使った町歩きの方法などを教えていただいたので

した。古い文献類は戊辰戦争の戦火で全て焼失してしまったと思っていましたし、こんな世界（郷土史研究）があるなんて私には驚きの連続でした。早々にルーツ探しの先輩達と巡り合えたのは本当に幸運なことでした。

最近テレビで放送されている「ファミリーヒストリー」や「ブラタモリ」の先駆けのような感じですか（笑）。



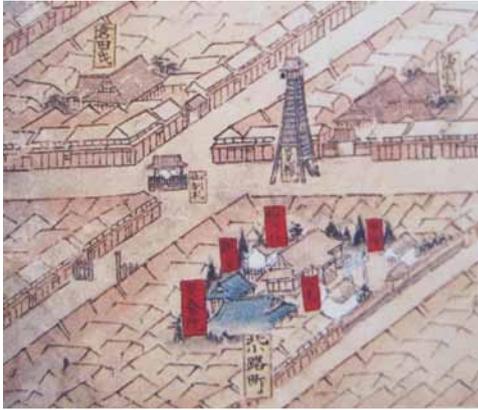
樋口次郎 兼光



直江兼続

五代前のご先祖・倉田佐仲さん

さて翌朝ホテルを出発すると、まずは戸籍に載っている宮下社長が一番古いご先祖様（五代前）の蔵田佐仲さんの住所に行きました。場所はレストランルーチェのすぐそばの北小路通り、田中稲荷の敷地先です。古絵地図にもこの田中稲荷はちゃんと載っていて、ちょうどこの日はこの田中稲荷の祭礼として、ほおずき市が開かれるようです。前回ご紹介した十日



赤い幟の立っている場所が田中稲荷です。絵図の下、「北小路町」と書かれているあたりが蔵田（倉田）佐仲さん宅でした



市では、この田中稲荷で初穂をいただく事も民衆の大切な新年行事の一つだったのです。そんな由緒ある田中稲荷、こんなご近所ですし、絶対ご先祖様達も参拝しているはずと、宮下社長は手を合わせました。



戸籍によると蔵田佐仲さんは明治初期にいったん米沢に移住するのですが、かなりの高齢になってから家族と一緒に会津若松に戻って来ています。

戊辰戦争の敗戦後、藩士の多くは青森に再興が許された斗南藩に移住しますが、三〇万石から三万石への極端な減俸だった為、藩はとも商人や農民まで連れていくことはできませんでした。斗南に移住した藩士も最初の冬で、多くの人が飢えと寒さで亡くなっていくのですが、敗戦後の会津に残された商人達、特に会津藩のお抱え商人だった検断（庄屋）一族達にとっても厳しい状況に変わりはありません。 「八重の桜」の山本八重さん一家は会津に残った少数派の藩士一家ですが、後に兄の山本覚馬が京都で生

きていると分かるまで、知人を頼って出稼ぎのため、一時米沢に住んでいます。

今となつては推測の域を出ませんが、蔵田佐仲さんも仕事を求めて米沢に移住したのではないのでしょうか。しかしやはり晩年は生まれ育った故郷で暮らしたかったでしょう、長男の喜右衛門さんは米沢でお嫁さんも貰っています。蔵田佐仲さんは長男一家も引き連れて会津に戻ってきています。



す。大町札の辻のすぐそばに住居を求めたのも偶然ではないと思います。



蒲生氏郷の町造り

現在の会津若松（旧）市街地の原型は戦国武将の蒲生氏郷が築きました。

時は天正一八年（一五九〇年）、豊臣秀吉は天下を統一したものの伊達正宗を始めとする旧勢力はまだまだ油断がならず、奥羽は秀吉の直接力の及ぶ地方ではなかったため、兵農分離・刀狩り・検地などもこれからでした。秀吉はそんな奥羽鎮護の要として誰をこの地に据えようか思索した末、優秀な武将である蒲生氏郷を会津に据えることにしたのです。

秀吉の杞憂の通り、氏郷は伊達正宗を抑えるのに散々苦労しますが、ようやく奥羽の仕置きをすませると、早速お城と城下町の本格的な整備に着手します。まずは「黒川」と呼ばれていた地名を「若松」と変名しました。

氏郷は弘治二年（一五五六年）滋賀県蒲生郡日野町に生まれました。日野町には蒲生家代々の氏神

である馬見岡綿向神社があり、その参道の両脇にはかつて松の木が沢山生い茂っていたようで「若松の森」と呼ばれていました。幼い氏郷もきつとこの松の森で遊んだことでしょう、その若松の森にちなんで、黒川の地名を「若松」に変更したと言われています。

氏郷は「とかく我には松の字吉相なり」と言い、会津の前任地である三重の松坂城を築城したときも、お城に「松」の字を使っています。

また蒲生家の家紋は当時、鶴を使った「立鶴紋」「舞鶴紋」だった



蒲生氏郷

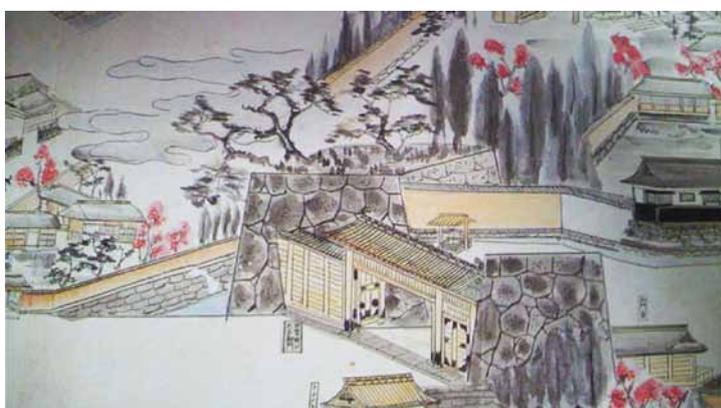


若松の森

たので、氏郷の幼名も鶴千代と言いました。そこで黒川城と呼ばれていたお城の名前を「鶴ヶ城」としました。

今に伝わる「会津若松」に「鶴ヶ城」の名称はまさにこの時に蒲生氏郷に名付けられたものなのです。

氏郷は鶴ヶ城を整備しつつ、お城の周りに武家屋敷を配置し、その周囲に外堀を巡らします。この堀の内は侍の住む町として郭内と呼ばれ一六の郭門で外部と隔てられました。そして堀の外側には郭外（町方）と呼ばれる商人や職人の町を配置したのです。



江戸期の甲賀口郭門（大手門）

甲賀町口郭門から北側には一直線に日野町（後の甲賀町）が割り出され、氏郷が故郷日野町から連れてきた日野商人達はこの通りに面して屋敷が与えられました。

この氏郷の城下町の大整備に大きな功労があったとして、宮下社長の遠祖である倉田新右衛門為実は大町札の辻に大きな屋敷を与え

られ、町検断となり、通り向いの築田家検断と共に町方の中心をなしていくこととなります。

ちなみに日野町は後に「火の町」に通じ火災の心配があるという理由で甲賀町と改名されます。近江の日野町と甲賀町はごく近い隣町なので、日野町と甲賀町は出身者も混在していたため、住民もすんなり改名を了承したと思われます。そして倉田家はこの近江国甲賀郡水口が本貫の地となります。

初代・倉田為実が会津に 来た訳

一般的に倉田家は蒲生氏郷の移封に付いて会津に来たと言われていますが、厳密に言う（倉田氏家譜によると）、倉田新右衛門為実は蒲生氏が会津に来る二八年も前、永禄五年（一五六二年）に会津に移り住んでいたと記されています。なので氏郷がこの地に移封してきた時は、為実は既に会津にある程度の経済的地盤ができてお



り、氏郷の城下町大整備に功勞することができたようです。

そもそもどうして為実が会津に移住してきたか、この経緯を直接語る資料はなく、この問題については今後の研究課題であると「倉田氏家譜（五〇頁）」は述べています。

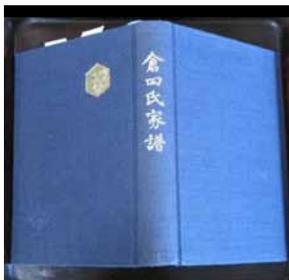
しかし「倉田氏家譜」には、興味深い下記の記事もあります。

倉田新右衛門為実は、天文一四年（一五四五年）近江国甲賀郡に生まれ、永禄五年（一五六二年）一八歳のとき、兄与左衛門とともに奥州岩城国黒川（現、若松）に巡業し来り、柳津虚空尊・圓藏寺に祈願している。

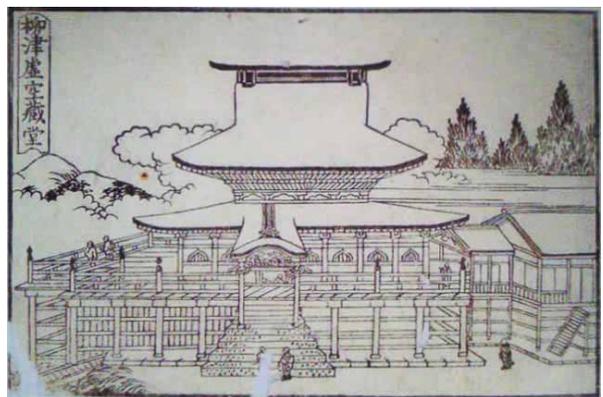
このとき「吾、この国に住して子孫永続の幸あれば、奉謝の供養をつとめる」と誓ったという。そして塔寺村から百夜の丑の刻（午前二時）参りを行い、満願の夜に奇特を蒙ったことを感じ会津に定住することに決心したという。

しかし、兄与左衛門とともに伊達郡に一時赴き、与左衛門は（伊達に）そのまま定住したが、為実は黒川に帰り、以後、この地に定住することになったのである。ときに永禄十一年（一五六八年）二十四歳であった。

※倉田氏家譜（二二〇頁）より



倉田氏家譜



本当に興味深いエピソードですね。与左衛門・為実兄弟が満願の夜に蒙った奇特とはどんなものだったのでしょうか。私は宮下社長著書『倭詩』の下記の記事を思い出しました。

十八歳の頃、琴学を習う為に上京し、牛乳配達で自活していた。朝三時に起き、300

杯の水垢離を自分に課して、半ズボンで真冬の都内を自転車で駆けた。

当然、手足の指は霜焼けに腫れ、腿や脛はあかぎれで切れ、血が噴き出ていた。それは、念仏を行じて雑念を払い、事に集中したためであった。それを何ヶ月か続けていったある早朝、口には「南無阿弥陀仏……」と一心に唱えながら、前方に牛乳瓶一杯積んだ自転車で、坂道を登っていた。ふと眼前を見上げると、暁天の空一面のそこには、活き活きと生ける如来様が眩きばかりに光彩を放って示現されていた。余りの驚きと有り難さで、震えながらその地に平伏した。

それ以来、大いなる存在のましますことを疑うことはなかった。

※『倭詩』(二五三頁)より

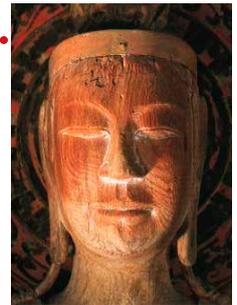
もしかして、与左衛門・為実兄弟もこんな風に虚空蔵菩薩様の示現を体験されたのかもしれないね。

一八歳の宮下社長は時空を超えてご先祖様と同じような体験をされたのでしょうか。

この体験の後、為実は越後国から馬一駄の塩を取り寄せ、虚空蔵菩薩に献納して奉謝の意を表しています。またその後は塩のかわりに黄金半両と鳥目(穴あき銭)七疋を献じて虚空蔵菩薩様へ供養を怠らなかつたようです。

虚空蔵といえば、弘法大師空海が若いころ悟りを開いた「虚空蔵菩薩求聞持聡明法」という瞑想法もありましたね。圓蔵寺の縁起によると、この虚空蔵菩薩は空海作と言われています。

ちなみに、虚空蔵菩薩様は「丑寅」の守り本尊です。寅年生まれ



の宮下社長の守り本尊は「虚空蔵菩薩」で、奈良斑鳩の里・法輪寺の「虚空蔵菩薩」様が、仏像の中で最も惹かれるとのこと、これも不思議な仏縁ですね。会津をはじめ東北地方では牛の事を「ペコ」と呼びます。

八〇七年、この虚空蔵菩薩の建立工事があつた時、人々は難工事で困っていました。その時どこからともなく赤い牛が現れ工事を助けてくれました。そして無事に本堂が完成しましたが、不思議なことに工事が終わると赤い牛は姿を消してしまつたそうです。

後年、蒲生氏郷が日野から連れてきた職人たちが、疫病退散祈願のために、この牛をモデルにして「赤べこ」を作ります。「赤べこ」は会津の代表的な郷土玩具として



幸せを運ぶ牛、子供の守り神として、現在も多くの人に愛されています。

氏郷が招いた日野職人達は主に日野椀といわれるお椀を作っていた木地職人であり、木を使った細工、漆塗りの技術に長けていました。やがてこの日野職人(商人)達が、「赤べこ」だけでなく、美しい会津塗や絵口ウソクなど、今に伝わる会津の代表的な伝統工芸品を作っていくことになるのです。

さて柳津虚空蔵菩薩の啓示を受け、会津に定住した倉田為

実 は木地職人ではなく獵銃の制作を生業としていたらしく、「家譜壺」には「善く鳥銃を作る。これを以て業となす」と記してあります。



天文一二年（一五四二年）に種子島に伝来した鉄砲は戦国大名によって日本に普及していきますが、鉄砲製造の技術は主に畿内・近江付近が先進地域になっていったので、倉田新右衛門為実の鳥銃製作の技術は、当然故郷の近江で取得したものと思われます。そしてこの鉄砲の商いの為に兄弟で奥州に行商に来た、というのが会津移住説の妥当なところではないでしょうか。

「ただ私はもうちよつと空想を膨らませて、伊賀出身の芭蕉の「奥の細道」の旅がそう言われているように、倉田兄弟が甲賀の出身ということもあり、行商と共に隠密（甲賀忍者）のような役目も持っている、奥州の様子を探りにきていたのではないかな？と思っています。でもある日、二人は隠密稼業に嫌気がさし、足を洗って会津の地に定住しようかどうか迷った末、兄弟で柳津の虚空蔵菩薩に百

夜の祈願しようと思いたったのは、と想像して楽しんでいきます。隠密（忍者）説はあくまで私の空想です！（笑）。
伊達郡（現在の福島県伊達市）に残ったという兄の与左衛門さんはその後どうなったのでしょうか。幸せな生涯を送り、今も子孫が続いていたら良いですね。



ちなみに、童門冬二さんの歴史小説『蒲生氏郷』には、西野仁右衛門という近江商人の生涯が、かなりのページをさいて描かれています。もしや倉田為実がモデルでは？と思われるような面白い物語でお勧めです。



現在の福島県伊達市 仙台・伊達家の本貫の地です

佐川（鬼）官兵衛

さて、蔵田佐仲さんの住居跡の次はリストランテ・ルーチェの物件先にある「鈴木屋利兵衛」に立ち寄りました。

鈴木屋利兵衛は安永年間創業の会津漆器の老舗です。この付近は戊辰戦争時には激戦地の一つとなりましたが、やがて薩摩軍の屯所（軍事基地件事務所）として占領されたことから鈴木屋利兵衛は焼失を免れました。



店の大黒柱には当時薩摩軍が付けたとされる刀傷が残っています。

薩摩軍の屯所として使われたということは、篠原國幹さん（『会津から近江そして倭へ②』で紹介した薩摩出身の陸軍少将）もきつとこの場所に入りましたことでしょう。

前回ご紹介した通り、篠原國幹さんは戊辰戦争時も西南戦争でも薩摩の勇猛な武士でしたが、会津にも佐川官兵衛という勇猛果敢な武士がいました。

佐川官兵衛は天保二年（一八三二年）九月五日会津藩の禄高三百石（物頭）の家に生まれ、剣と馬術、歌道に秀でた文武両道の士として知られました。

鳥羽伏見の戦いで薩長と戦った際は刀が折れて更に銃弾により右目を負傷したのにも関わらず平然と指揮を執り奮戦したことから、西軍に恐れられ「鬼官兵衛」と呼ばれるようになりました。

藩士達からの人望も篤く、「佐川の人望は薩摩における西郷のようなだ」と言われました。

戊辰戦争敗戦後、官兵衛は斗南藩の困窮生活の中で妻を亡くし、薩摩藩置県後は会津に戻り喜多方で暮らしはじめます。



当時、喜多方には佐川官兵衛を慕って、沢山の旧藩士が青森から戻って来ていました。私の先祖の樋口萬吾も青森から喜多方に移住して戸長を務めています。きつと官兵衛さんを慕って戻ってきたのでしょうか。佐川官兵衛は喜多方でも老母を抱えて極貧生活を送ります。

その頃、警視庁を設立し初代長官となった川路利良（旧・薩摩藩士）は、旧会津藩士達の人望篤い佐川官兵衛に再々出仕を促しますが、官兵衛は新政府への出仕を厭い何度も固辞します。

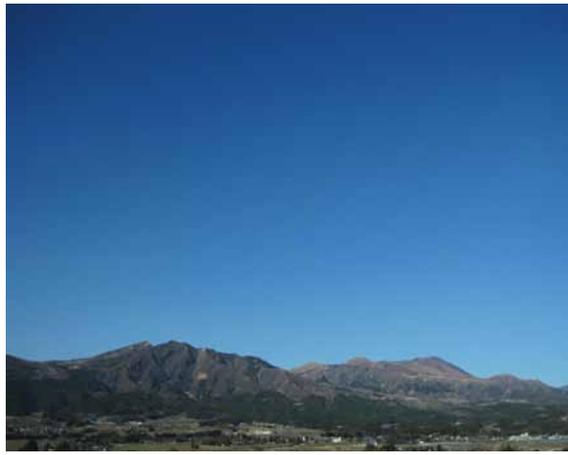
しかし自分を慕い喜多方にきたものの、生活苦に喘ぎ苦しむ旧藩士達を見て警視庁に奉職することを決意しました。

明治七年、官兵衛は三百人の旧会津藩士達を伴って東京に行き、大警部に就任します。

そして明治十年（一八七七）の西南の役が起きた時、麹町の警察署長をしていた官兵衛は、西南戦争に参戦するよう政府から命ぜら

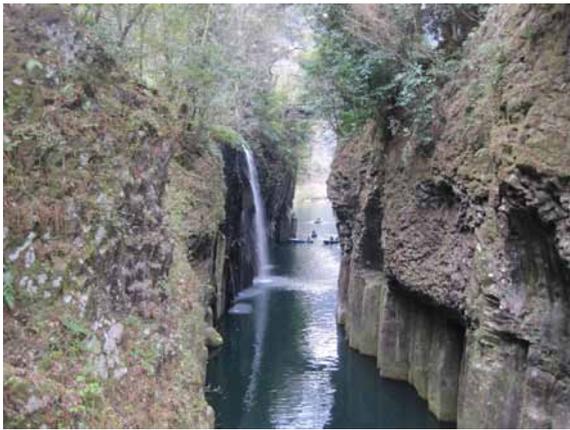
れました。官兵衛は部下を引き連れ、東京から船で小倉に上陸し、大分〜久住〜竹田を経て阿蘇へ入り、やがてその地で壮絶な最後を迎えることとなります。

佐川官兵衛は最後の数日を南阿



蘇の白水村という場所で過ごしています。白水村は名前の通り、澄み切った水が豊富に湧き出でる本当に美しい土地で、全国名水百選に選ばれた白川水源や寺坂水源など七つの有名な水源があります。

阿蘇山の麓には有名な草千里と呼ばれる緑の大草原が広がり、夜には都会からは信じられないような美しい星空を見ることが出来ます。阿蘇山の恵みで温泉も豊富で、近くには日本神話の故郷、高千穂峡も控えています。



地元の人々は初め、官軍も略奪を働くのではないかと心配しましたが、官兵衛は不正行為がないよう規律を徹底し、村人にも誠意を込めて親切に対応したため、村人達は安心して、尊敬と親しみを込めて官兵衛を「鬼さま」と呼んだそうです。

出軍の朝、官兵衛は真新しい肌着に身を包み、地元の名水・明神ヶ池の水を飲み、辞世の句を読みました。

君が為都の空を打ちいでて

阿蘇山麓に身は露となる

明治十年三月一八日、官兵衛一行は坂梨峠で薩摩軍と遭遇、七時間わたる死闘の末、官兵衛は胸に二発の銃弾を受け戦死しました。享年四七歳。遺体は大分の護国神社に埋葬されました。

会津の猛将は辞世の句のままに九州阿蘇の露と消えたのでした。しかし南阿蘇の白水村では官兵衛の遺徳が代々語り継がれ、明



神ヶ池の周辺には佐川官兵衛の記念碑が四方所も建てられ、阿蘇郡内にも官兵衛の慰霊碑が十数カ所も建立されました。阿蘇の人々がどれほど官兵衛に尊敬の念を抱いていたかが分かります。

そして現在、南阿蘇村の明神池の畔には「佐川（鬼）官兵衛顕彰館」が設立され、館長の興梠（ころぎ）二雄氏が佐川官兵衛の遺徳を世に広め続けています。

九州の方達との交流

二〇〇八年から二〇〇九年にかけて、私は西南戦争で戦死したという先祖・樋口厳吾の情報を求め、長崎、熊本、阿蘇そして宮崎を訪れました。

まず長崎では現地の郷土史家の平野恵子さんに長崎の病院で死亡したという樋口厳吾さんの墓所を案内していただきました。名前が似ているので萬吾と同一人物ではないかと思ったのですが、厳吾さ



鬼官兵衛記念館

んは一族の方ではあったものの私の探す萬吾さんではありませんでした。

しかし後に平野恵子さんが、ある雑誌にこの墓参の事を寄稿して下さった記事を読んで、鹿児島の郷土史家の方が鹿児島の郷土史家の方に墓所の情報を寄せて下さる事になります。平野恵子さんは「長崎微熱」というHPを運営されていて、華やかな歴史の舞台裏で消えかけている人々の足跡を拾い紡いでいらつしやいます。

熊本では会津の熱烈なファンであり、佐川官兵衛顕彰会の会員さんでもある澤田健二さんが熊本城から田原坂、各地に点在する官軍墓所を案内してくださり、阿蘇にある顕彰館まで連れて行ってくだ



中村彰彦



郷土史家の平野恵子さん

さいました。

田原坂は薩摩の篠原國幹さんが戦死した激戦地ですが、上記の樋口厳吾さんが致命傷を負った地でもありました。厳吾さんはその後長崎の病院に搬送され亡くなったそうです。享年一九歳。

後に私は東京で厳吾さんの直系の子孫の方々ともお会いする事になるのですが、厳吾さんは



樋口厳吾さんの墓所



顕彰会の澤田健二さんと熊本城にて



激戦地・田原坂

大変頭の良い優秀な方だったと言
い伝わっているそうです。

佐川（鬼）官兵衛顕彰館の興梶
二雄さんは、自宅の一部を開放し
て佐川官兵衛顕彰館を設立されて
いました。家の庭先には名水がこ
んこんと湧き出る明神池が広がっ
ています。

興梶館長は、官兵衛さんの戦死
の地はもとより、阿蘇山や高千穂
などあちこちを案内してください
ました。

また直木賞作家の中村先生をご
紹介いただき、中村先生に歴史に
埋もれていた同族の一人、「樋口
光」の功績を歴史雑誌に発表して
いただくというご縁もいただきま
した。

更に二〇一一年に東日本大震災
が起こった時に、関東では水道水
から放射性物質が検出され水の買
い占めが起きました。我が家も
ミネラルウォーターが不足して、
これはもう水道水を飲むしかない
な、と諦めた時にも、興梶館長は
阿蘇から美しい明神池の水をタン



鬼官兵衛顕彰館

ク一杯入れて送って下さったので
した。

興梶館長のご先祖様は、神代の
時代、ニニギノミコトが高千穂に
天孫降臨した際、従者だったアマ
ノウズメと道案内に立った猿田彦
が結婚することになった時、二人の
ために神聖な木で
新居を造った方と
いうことでした。
「興梶」とは「軒
のあがった家（立
派な家）」を指す



興梶二雄館長

佐川官兵
衛が白水村
に滞在した
のは、戦死
する前のほ
んの四日間

とされ、当初は「神呂木（カ
ムロギ、カムロミ）」と呼
ばれていたのが転じて「コ
オロギ」となったそうです。
ちょうど日本神話に興味
を持ち始めていた私が、何
回もご先祖様の事を聞く
と、そのつど興梶館長はニ
ニコ笑いながら、

「私のご先祖様の話はいい
んですよ、それよりも佐川官兵衛
はね・・・」と、嬉しそうに官兵
衛さんの話を始めるのです。その
姿に私は本当にびっくりしまし
た。会津から遠く離れたこの南阿
蘇の地で、官兵衛さんとは何の血
縁もないのにも関わらず顕彰館ま
で作ってしまい、ご自分の先祖の
事よりも官兵衛さんの話ばかりし
たがる興梶館長・・・。



神話の地・高千穂の峰にて

だったそうです、それなのにこん
なにまで思っして下さい、これを
ご縁と言わずして何と云うので
しょうか。そしてそんな不思議な
ご縁が一三〇年以上経った今も
脈々と生きていて、私や私の先祖
にまで恩恵を与えてくださる。官
兵衛さんをはじめ、目に見えない
全てのご縁と存在に心から感謝し
ました。

九州の地震

先月の四月一六日、熊本や阿蘇
地方が大きな地震に襲われまし
た。佐川（鬼）官兵衛顕彰館があ

る南阿蘇でも阿蘇大橋が崩落し、東海大学の学生さんや何人もの方の尊い命が失われました。

興梠館長には一週間以上たってようやく連絡が取れました。幸いご夫婦共々無事で、自宅や顕彰館のある場所は地盤がしっかりとあるので崩壊を免れ、阿蘇や熊本に沢山いる会員達さんも命は助かったそうです。

ただ義弟であり事務局長さんである方の自宅は土砂で流されてしまい、阿蘇に点在する佐川官兵衛さんの顕彰碑なども、無残に崩壊してしまつたそうです。

ご本人の了解を得て、以下、お手紙の一部を掲載させていただきます。

~~~~~  
(前略) 報道されて居ります様に、本月一四日震度7.3以上という未だ経験したことのない地震に見舞われ、南阿蘇村も停電・断水、道路の不通、コンビニ・スーパー等の閉鎖、移動も給油所の不能により、テレビ・ラジオ等の情報も

一切入らず、夜はローソクの灯りを頼りに余震に怯えながらの一週間でした。

ようやく送電され、南阿蘇に通じる阿蘇大橋の崩落、俵山トンネルの崩壊、阿蘇鉄道の損壊を知り、全く陸の孤島と化し、電話の不通、新聞郵便物の不配等が続き、電気水道の有り難さを身を以て知らされました。

幸いにも他の箇所の方々には避難所の生活を送って居られますが、私共はお蔭様で棚の品物が落下した位で無事で、息子達・孫達夫婦も我が家に避難しており、一緒に生活しております。(中略)

残念なのは、(新聞記者の方に聞いたのですが)佐川官兵衛討死の地碑、西南公園の殉難の碑、長門屋の足跡碑等が無残なまでに崩壊してしまつた事で、まだ余震が続く、道路が遮断され現地に行けない状態です。

会津の方からも再三、電話等を頂き、前市長さんからは皆さんに募金を呼びかけ募金活動を始めた

と有り難い連絡をいただいております。(後略)

~~~~~  
きつとまた顕彰碑が再建できま
すように、そして一日もはやく被災地が復興しますように。私も微力ではありますが、会津にそして



佐川官兵衛顕彰碑の数々

~~~~~  
九州に縁のある一人としてこれからも応援していきたいと思っております。

## 蒲生氏郷の墓所

会津案内に戻り、鈴木屋利兵衛の次は、蒲生氏郷の墓所がある興徳寺へと行きました。

氏郷は文禄四年（一五九五年）、二月七日、京都にて四〇歳の若さでこの世を去りました。辞世の句は、

くかぎりあれば吹かねど花は散るものを心みじかき春の山風く

人生五〇年とうたわれた戦国時代にあっても、やはり四〇歳で逝くのは早すぎると感じたのでしょうか。その若さと状況から毒殺説もささやかれている氏郷の死です。

氏郷が会津にいたのはわずか四年でした。しかしその四年の間に氏郷は、現在に繋がる会津若松の町造り、産業造り、祭りや市など文化行事の基盤の殆どを築いて逝ったのでした。戦国乱世が終息した時期に蒲生氏郷のような人が会津に来てくれたことは、この地



にとつては本当に幸いなことだったと思います。

佐川官兵衛も四日しか南阿蘇にいなかったのにも関わらず、多くの村人に慕われ続けました。氏郷も四年という短い期間ではありましたが、今もその功績と人柄は多くの会津人に愛され尊敬され慕われ続けています。人と人、また人と土地の出会いも何か目に見えない因縁というようなものがあるのでしょうか。

蒲生氏郷は合戦では銀の鯰尾なますおの兜をいただき、常に先人に立つ勇

敢な主将であり、茶の湯や歌道にも通じた、まさに文武両道の武人ぶりのぶでした。

また、千利休五哲の弟子の一人にして、キリシタン大名としても有名でした。そんな氏郷やキリスト教、茶道との関わりにも興味深いものがあります。詳しくは先月発表された、宮下社長の「倭詩二〇一六年番外編『今ここに』」をご覧ください。



実は蒲生氏郷は豊臣秀吉から会津の移封を決められ、黒川城に入った時に、一人物思いに沈み、涙を流したという逸話が伝わっています。それを見た家臣が「この度の栄達による嬉し涙でしようか」と問うと、「恩賞ならば小国でも都近き西国であれば、武功も

将来も望めるものを、この辺境ではその機会もない」とさらに涙を流したそうです。

確かに会津は都近くに生まれ育った氏郷にとつて辺境の地だったでしょう。また旧領の松坂は天守閣が完成して新たに築いた城下町も完成したばかり、それをまた新たな地で一から始めなければならなかったのです。そして何より先祖伝来の近江日野からも遠く隔てられてしまったことも痛手だったでしょう。真贋論論ありますが、こんな歌を残しています。

くおもいきや人の行方の定めなき我が故郷をよそにみんとはく

それでも腐ることなく、会津の発展に尽力を尽くしてくれた蒲生氏郷に心より感謝しています。そして、西軍・東軍問わず、日本国の夜明けのために命を捧げてくれた、幕末期全ての武士ぶし達にも。

ルーツ探しを進めながら、歴史の勉強を深めていくと、有名無名

の全ての先人達の汗と涙のお蔭様  
で今の日本があるだどつくづく思  
い知らされます。

### 川内原発を・・・

今、私達が一四〇年前の幕末の  
ご先祖様達を見るように、一〇〇  
年後の子孫達は今のこの時代をど  
う見るのでしょうか。九州でこん  
な悲惨な地震被害が起こっても、  
鹿児島川内の原子力発電所は稼働  
を続けています。もし次は鹿児島  
が大きな地震に襲われたら、そし  
て九州や日本全体が人が住めない  
ような土地になってしまったら  
……。かつて氏郷が故郷を通り過



ぎる時に歌った和  
歌のように子孫達  
は外国から故郷を  
眺めているような  
未来になってしま  
うかもしれないま  
まならなくなつ  
てしまった今の福  
島県沿岸部の現状  
を見ると、決して大げさな話では  
ないと思うのです。  
高千穂の峰々は神様の世界がそ  
のまま降りてきていような本当  
に神秘的な美しい場所でした。  
日本神話の神様がまだ息づいて  
いるような歴史の深さを体感でき  
る土地でした。

長崎も熊本も阿蘇も、宮崎  
も霧島も鹿児島も、九州は本  
当に緑の濃い美しい大地でし  
た。こんな歴史ある美しい故  
郷をよそに見るような未来を  
招いてはいけないと痛感して  
います。

氏郷の墓所を後にして、次



は唯一残る郭門跡に行  
きました。武家屋敷と  
町人の町を隔てていた  
外堀は現在埋め立てら  
れ消滅し、一六か所  
あった郭門も甲賀町口  
に石垣の一部が残って  
いるだけです。

そしてここから真つ  
直ぐ北に延びる甲賀町

に宮下社長の御祖母様が生まれた  
場所がありました。そして曾  
祖父様が幼い一人娘を腕にい  
だいて、新天地である北海道



現在唯一残る甲賀町口郭門跡

に飛び立った場所も。  
次回はそこからお届けしたいと  
思います。

九州に先人訪ね旅すれば  
神代の夢ともものふの道

二〇一六年五月七日

大橋 しのぶ

## 5月のお勧め情報

**秘仏御開帳**

三十三年に一度の盛儀

秘仏本尊様のお姿を拝し、その功德を分かち合うまたとない機会です。

平成28年  
4月13日(水)～5月15日(日)  
柳津虚空蔵尊

|                                                      |                                      |
|------------------------------------------------------|--------------------------------------|
| 秘仏御開帳                                                | 期間内の拝観時間                             |
| 拝観時間 午前9時～午後4時<br>※平日・土曜日は午後3時まで<br>※休日・年中無休で拝観できます。 | 10時～11時 12時～14時 15時～16時              |
| 拝観料 大人 800円<br>小学生 500円<br>障 障 (0歳～11歳) → 入 600円     | 4/13 12時 14時 15時<br>5/15 10時 11時 12時 |

※こちらは会津ではなく宮城にあるほうの柳津虚空蔵尊ですが、宝性院の概要によると宝亀2年(771年)3月、大伴家持がご本尊様を拝して『福島の会津柳津、山口の柳津に安置している仏像も同じく行基の作で、日本三所の秘仏である、かくも尊いものなれば、33年目毎に開帳する外、みだりに衆人これを拝すること恐れあり』と言ったそうです。今年がその、33年に一度の貴重な御開帳年です。お近くの方は是非どうぞ！

所在地 〒986-0401

宮城県登米市津山町柳津字大柳津 63

宗教法人 宝性院

みなとがわ

湊川神社参拝セミナー  
予定調和を超えろ!

決められた未来を変える神人合一の秘儀

5/21(土) 参拝編・5/22(日) 奥義編



兵庫県神戸市の湊川神社にて楠木正成のセミナーが開催されます。

今、世界中でも日本人の高い精神性が取り沙汰されています。大和魂を語るにおいてはこの楠木正成をなくして語ることはできません。

(詳細&お申込みは)

ゆにわ塾(旧・北極流センテッククラブ)まで

TEL 072-864-5640 受付時間 9:00～12:00 15:00～19:00



石心鉄肝この人の情 芭蕉

※宮下社長は神戸で暮らしていた20代の頃、楠木正成公の遺徳を偲び13年間毎月、湊川神社に参拝したそうです! (『エリクサーから無限心へ 中の章』参照) 私(大橋)もセミナーに参加予定です。

### ●著者プロフィール 大橋 しのぶ

寺田本家23代目当主故・寺田啓佐さんとの出会いにより、蔵の微生物をテーマにした小説を書き、小冊子を発行することに。ペンネームで発表した小冊子作品は5作になる。2015年、まほろば社長宮下周平と共にルーツ探しの旅の案内人として同行。神奈川県在住。